

汽水域研究会 News Letter

特集記事

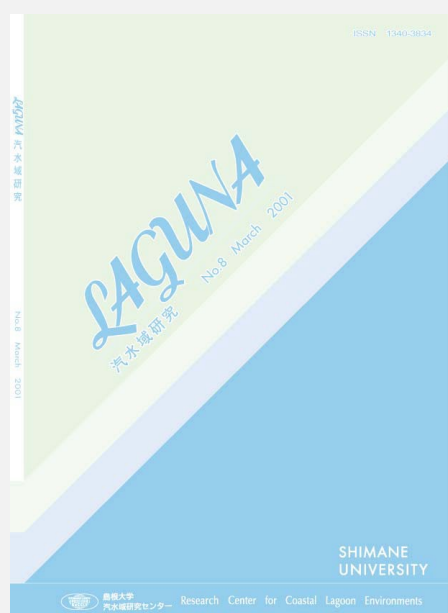
汽水域研究 (Laguna) のあゆみ

汽水域研究会の会誌である汽水域研究 (Laguna) は、査読付き学術雑誌として発行されている。継続前誌は同じく汽水域研究 (Laguna) として、島根大学汽水域研究センターから発行されていた。第1号は1994年3月発行。8本の論文と活動報告などが収録されている。第7号 (2000年) からホームページでpdfファイルの公開が始まり、第11号 (2004年) では表紙がリニューアルされた。

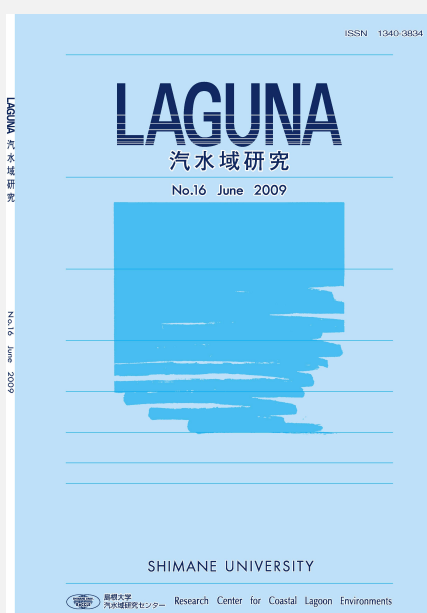
これまでに掲載された論文のタイトルは、汽水域に関わる研究の学際的な広がりを反映し、論文の内容は考古学、地質学、生態学、水産学など多岐にわたっている。第22号 (2015年) までのタイトルに含まれる語句を検索すると、「環境」が最も頻出し、以下、「湖底」「水質」が続いた。日本最大の汽水域である宍道湖・中海をフィールドとし、日本各地から来た研究者が調査を行って成果をLagunaに発表する、といったスタイルが多かったが、宍道湖・中海以外の世界各地の「汽水域」に関する研究の論文も数多く掲載されている。

当時、汽水域研究 (Laguna) の位置づけは、島根大学汽水域研究センターの紀要という扱いであった。しかし、国立国会図書館やCiNiiなどのデータベースから検索可能で入手困難ではなかったこと、関連する研究分野の他誌の論文において引用されていたことなどから、日本各地の「汽水域」関係研究者にはその存在が広く知れ渡っていた。また、汽水域研究 (Laguna) による研究成果の発信や島根大学汽水域研究センターの協力研究員のネットワークは、現在の汽水域研究会の下地とも言える活動であった。

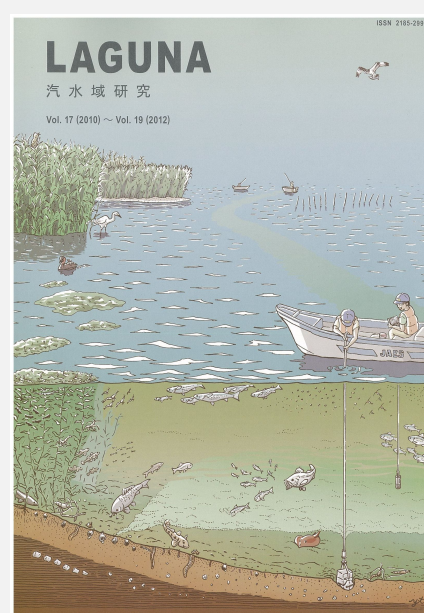
しかしながら一方で、大学の紀要という扱いは他の専門誌と比べると、場合によっては十分に評価されにくい風潮が広がる中、汽水域研究 (Laguna) の今後の展開が検討課題となっていた。また、汽水域研究 (Laguna) は紀要とはいえ編集委員会による査読を行っており、掲載に至らない投稿原稿もあったが、査読誌ではないと思われることも多かった。



No. 1 ~ 10 (1994~2003)



No. 11 ~ 16 (2004~2009)



Vol. 17 ~ 22 (2010~2015)

図1 汽水域研究 (Laguna) の表紙デザインの変遷

特集記事

汽水域研究 (Laguna) のあゆみ

2009年に汽水域研究会が発足し、汽水域研究 (Laguna) は汽水域研究会の発行による査読付き学術雑誌として再出発した。それまでは第〇号と呼ばれていたものを、第〇巻として基本的にpdfファイルの随時掲載という方法を取るようになった。より迅速により広く、研究成果を公表する現代の時流に沿った方向性と言える。2014年3月には、第17巻から第19巻までを合本した形で、汽水域研究 (Laguna) の印刷版を発行することになった。それまでpdfファイルの随時掲載であったので、表紙が存在しておらず、イラストレーターのつじいようすけ氏にオリジナルイラストを提供していただき、装いも生まれ変わった汽水域研究 (Laguna) が出来上がった。

現在、研究会の予算の都合上、複数巻を合本して印刷する、という裏技による節約を余儀なくされている。しかし今後、掲載される論文数が増えることによって、合本どころから号に分割しなくてはならなくなるかもしれない。実際、このことを見込んで、「号」から「巻」に呼称が変更されたという説が有力となっている。

汽水域に関する研究は学際的であり、既存の固定された研究分野の垣根を越えた交流が原動力である。汽水域研究 (Laguna) による研究成果の公表を通じて、汽水域に関する研究が今後ますます活発になることが期待されている。

(汽水域研究会情報幹事 倉田健悟)

Q: 汽水域研究 (Laguna) の
タイトルに含まれる地名のうち、
最も多いのは次のどれでしょう？

1. 穴道湖
2. 中海
3. 斐伊川

(答えは4ページに掲載)

特集記事

汽水域研究会会員の皆様へ (LAGUNA編集委員会より)

汽水域に関する研究成果の社会への発信と、汽水域に関する情報共有を目的として刊行されているLAGUNAも、汽水域研究会が発行するようになり7年が経ちました。査読付き学術雑誌として、厳正な審査を行うようになり、一時は原稿がほとんど寄せられない状態でしたが、投稿数は増加傾向にあり、2016年には8編の論文が投稿され、そのうち5編が23巻に掲載され、1編が24巻に掲載、1編が継続査読中です。

私が編集委員長を務めるようになり1年以上が過ぎ、これまでの投稿原稿の状況を検討し、2017年3月付けで投稿規定・投稿要領を一部改訂いたしました。最も大きな改訂点は原稿カテゴリーの変更です。原著論文を「論文」とし、独創的研究の論文で、汽水域に関する新しい事実や価値ある内容を含むもの、あるいは新技術を含む未発表のものを広く受け入れるとともに、「寄稿・記事」を新設し、汽水域に関連する様々な情報の提供や紹介、解説、メッセージ、書評など、汽水域研究に関するより幅広い原稿の掲載を可能としました。

また、編集委員に新たに2名にご参加いただきました。アリゾナ大学のDavid Dettman先生には、投稿者の希望があれば英文アブストラクトの校閲をお願いすることができます。また、大阪工業大学の小島夏彦先生にもご参加いただき、汽水域のプランクトン類に関するより広く充実した審査が可能となりました。

このようにLAGUNAは汽水域研究に関する様々なニーズに対応できるように、日々進化を続けております。汽水域研究会の当面の目標である「学術会議協力学術研究団体となること」「学術会議に認められた審査誌になること」には、LAGUNAを通じた活発な学術論文および情報の発信・パフォーマンスの向上が必要です。会員の皆様には、ますますの論文投稿と寄稿をよろしくお願いいたします。

引き続き24巻の原稿を絶賛募集中です！！

(LAGUNA編集委員会委員長 山口啓子)

例会報告

汽水域研究会第5回例会（合同研究発表会）会長賞



図2 合同研究発表会の会場

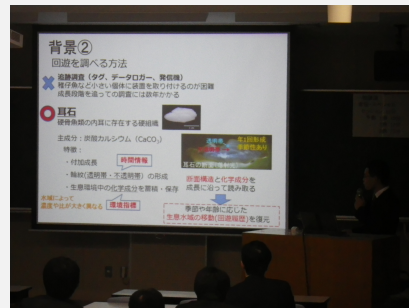


図3 細田真生さんによる研究発表

細田真生（島根大学生物資源科学研究科）「斐伊川水系産スズキの耳石酸素安定同位体比を用いた回遊履歴の推定」

この度は、汽水域研究会会長賞という素晴らしい賞を表彰して頂き大変光栄に思います。私は、宍道湖や中海で重要な水産資源となっているスズキを対象に、スズキの耳石を用いた回遊履歴解読手法を確立し、その水域利用の把握を目指しています。聴講者の方からは大変興味深いとお声をかけて頂き、とても励みになりました。この研究は、まだまだ発展途上の段階であり課題も残されているので、さらに次の段階へステップアップしていくつもりです。将来的には、確立した手法を他魚種に利用したり、資源の保管理に役立てたりして、地域に貢献できるような研究になればと思っております。最後に、研究のご指導を下さった指導教員の山口啓子教授、手伝いをして下さった研究室の学生をはじめ、関わった多くの方々にお礼申し上げます。

飯田直紀（島根大学生物資源科学部）「サルボウガイの殻体を用いた環境モニタリング手法の検討」

この度は、このような素晴らしい賞を頂いたことに大変ありがたく感じております。私がこのような賞を頂いたのは、よき先生のご指導や先輩からのアドバイス、調査や実験の協力をしてくださった研究室のメンバーに恵まれたおかげです。心から感謝致します。

私の研究は、中海の特産物であった赤貝（サルボウガイ）の殻を用いて、かつての中海の環境を知るための手法を検討することです。土地改良事業によって変化してしまった中海の環境を修復する上で、目指すべきかつての中海の環境を知ることは重要であると考えられます。この研究は、まだ突き詰めるべきことが多くあるので、後輩に頑張ってもらい、いつか中海の環境改善や赤貝の養殖に活用され、この地域の方々に貢献できる日が来ればと思います。

情報

● 関連学会の2017年度大会

2017年日本プランクトン学会・日本ベントス学会・合同大会

日程：2017年9月3日（日）～9月5日（火）

場所：滋賀県立大学

日本陸水学会 第82回大会（仙北市田沢湖大会）

日程：2017年9月28日（木）～10月1日（日）

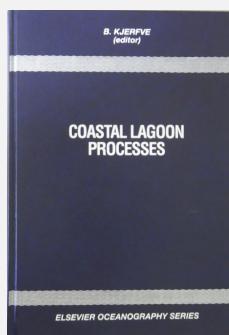
場所：田沢湖高原温泉郷 駒ヶ岳グランドホテル

日本海洋学会2017年度秋季大会

日程：2017年10月13日（金）～10月17日（火）

場所：仙台国際センターほか

おすすめ書籍



B. Kjerfve 編 (1994) Coastal Lagoon Processes

本書で著者は内陸の沿岸水域を地形により6種類に定義する作業仮説に基づき、「Coastal Lagoon」が他の水域とは何が異なり何が同じなのかを明らかにしようとする。地形から「Estuary」とは最も異なる点、すなわち海との経路「inlet」と水域「basin」の大きさの比は、水循環、塩分、熱エネルギー、栄養塩、堆積物、一次生産、等々、生態系を特徴づける要素に影響するという指摘が随所に見られる。

このことはまた、「Coastal Lagoon」や「Estuary」が場所によって異なる様相を示す裏返しでもあり、汽水域研究が複雑かつ動的な系を扱っている分野であることを再認識させられる。

第9回大会案内

汽水域研究会第9回大会（高知大会）のご案内

汽水域研究会2017年大会は2017（平成29）年10月7日（土）・8日（日）に高知県で開催します。汽水域研究会初の四国開催になります。本大会のテーマは、「汽水域を『つながり』の中で考える」です。異なる自然環境や各専門分野から汽水域を俯瞰する切り口で、あらためて汽水域の特徴を再考する機会とします。

本大会では、高知大学朝倉キャンパスを主会場として、「汽水域を百学連環で考える」シンポジウムや一般発表に加えて、世界初のトンボ保護区設立を呼び掛け、環境学習活動をおこなっている四万十川学遊館の視察を中心とするエクスカージョンなど多彩なプログラムを企画中です。みなさんのご参加をお待ちしています。

日時：2017年10月7日（土）～8日（日）

主会場：高知大学朝倉キャンパス（高知県高知市曙町2-5-1）

基本方式：エクスカージョン1日+シンポジウム1日のセット形式（一般発表はポスター発表のみ）

詳細は汽水域研究会ホームページやメーリングリストで随時アナウンスしますので、お楽しみに！

（汽水域研究会大会幹事 山田和芳）

特集記事

汽水域研究（Laguna）の論文タイトル検索結果

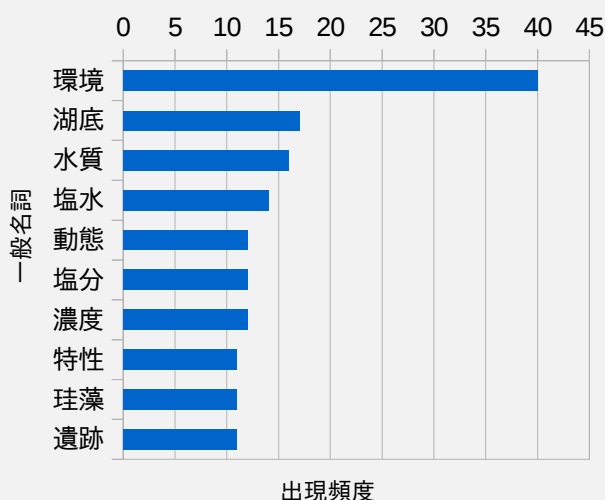


図4 Laguna論文タイトルに含まれる一般名詞の出現頻度

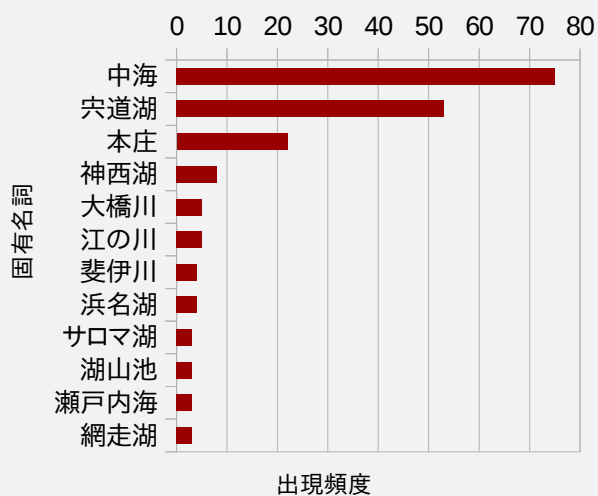


図5 Laguna論文タイトルに含まれる固有名詞の出現頻度

会員数（2017年4月30日）

正会員：86名（+4, -1）、賛助会員：5名（0）、
学生会員：33名（+9, -1）、計：124名
#2016年11月30日からの増減

編集後記

中海のオゴノリなどの海藻類を肥料にする取り組みが本格化して今年が7年目。最近、オゴノリが前ほど採れなくなってきているそうです。一方で宍道湖のシオグサは採りきれないほど多いとのこと・・・。（倉）

汽水域研究会ニュースレター第15号 2017年5月20日発行 編集・発行：汽水域研究会
〒690-8504 島根県松江市西川津町1060島根大学汽水域研究センター内 汽水域研究会事務局
office.rgbwa@gmail.com 0852-32-6436 (phone&fax)